

平成30年度北海道男女平等参画チャレンジ賞贈呈式

懇談内容

日時：平成31年1月22日（火）16時00分～16時30分

場所：北海道庁本庁舎3階 知事会議室

牧野准子さん

ユニバーサルデザイン(有)環工房の牧野准子と申します。38歳の時に建築デザインの会社を設立しました。インテリアコーディネーターと建築士の仕事をしていました。花を通してのまちづくり活動にも力を注いでいました。旭川で、旭川ガーデニングネットワークという会をその頃作りまして、昨年で丁度20周年を迎えることができました。やっと軌道にのり、仕事が楽しくて三人の子育てもしながら寝ないで夢中で働いていました。そうしたら平成17年に、脊髄の進行性の難病を発症してしまい、少しずつ歩けなくなって途中杖歩行のときもありましたけれども、今は車いすを使う障がい者になりました。落ち込みました。一時は自分がダメな人間になってしまったような気がして、何も考えられず何もする気が起きなくていたときもありましたけれども、色々な経験を積んでカウンセリングなども学びまして人と関わることによって、自分を見つめ直すことができました。車いすの私だからわかったこと、障がいをもっている私だから出来ることを見つけました。出来ないことを残念だと思うよりは、出来ることをしないほうが残念だと思えるようになりました。

障がい当事者講師の会すぶりんぐの代表もさせて頂いております。こちらは本当にボランティアでお金にも全然ならない活動なんですけど、でもやめられないんですよ。障がいのある人への理解やノーマライゼーション理念、SDGsの共生社会の実現の為に様々な障がいを持つ仲間と頑張っています。この会は障がいがあってもできることを自分たちで見つけて発信していくことをしています。障がい者の生の声を伝えるスピーチマラソンもその活動の一つです。今年で設立して7年になります。その他に障がいのある人のファッションショーも続けて5年になります。障がいがあってもオシャレは楽しみたいですし、身なりを整えることによって社会に出て行こうという意欲に繋がるように思います。私はFMの三角山放送局のパーソナリティーもさせて頂いているのですが、今年で8年目になります。平成30年、還暦を迎えました。その年にこんな素敵なお褒めを頂けて、とても嬉しくて励みになりました。ありがとうございました。これからもチャレンジし続けていきたいと思えます。それで何か資料をとということで一枚だけお配りしているのですが、ちょっと先週ですね、うちの子ども達からこんなメッセージをもらいまして、これのなかに今の私の気持ちが全部詰まっているような気がして、これだけ持って参りました。これにつきると思えます。ありがとうございました。

高橋知事

まりさん、あつしさん、かずきさん。男の子二人と女の子一人？

牧野准子さん

はい、そうです。

高橋知事

良いお子さんでしょうね。

牧野准子さん

こんなメッセージをくれるというのは考えてもいなかったので、嬉しかったです。

高橋知事

ありがとうございました。

廣畑室長

それでは次に大海様お願いいたします。

大海恵聖さん

エムバイピークリエイティブジャパンの代表、大海恵聖といいます。株式会社ですけども、ひとりでやって、一人で考えて作って売っているという会社です。牧野さんのように立派な言葉は用意してきていないんですけど、想いで動いている様なタイプなので、気持ちを話してできればな、という感じで今日はやってきました。私は北洋銀行の本店のロビーアテンダントという案内の仕事をずっとしていたんですけど、本店にいたときに関節リウマチになりました。その時に、立っているのも大変だったとかそういうこともあり、もう辞めようかなと思ったときに、「関節リウマチになった、このネタで何か稼げれば私は病気に勝てるんじゃないか」と。関節リウマチになってだんだん手とかが動かなくなってきたので、1年くらいはふて腐れ生活みたいな感じだったんです。けれども、1年経つとどうやれば体調が良くなるかが分かってきて、そこから「じゃあこれで何か出来ないかな」というところで、デコ杖というのを考えました。その杖も、銀行にキラキラの杖を持ってきたお客様がいて、すごくキラキラだったので思わず声をかけてしまった。その声をかけてしまったというのがとても大切なことじゃないかなと思って。病気の人と病気じゃない人の（ふれあいの）きっかけというのは、そういうことじゃないかなと。それで、最初にやったファッションショーがまさに牧野さんと一緒にやったファッションショー。

高橋知事

じゃあ前から（お互いに）ご存じだったんですね。

大海恵聖さん

そうなんです。3Dプリンターで車いすのピアスとか、こういうものを作っていて、最初のきっかけはこれなんです。最初に車いすを借りた人が牧野さんなんです。

牧野准子さん

その車いす私の車いすなんです。3Dプリンターで作って。

大海恵聖さん

そうなんです。受賞の時の発表で牧野さんの名前が並んでいて私たちが一番びっくりして。

高橋知事

じゃあその、等身大というか普通の大きさの車いすを縮小して？

大海恵聖さん

縮小して、ずっと小さくデフォルメするんですけど、かっこよくデフォルメしなければかっこよくないので。それで、周りに車いすの友達が沢山いて、自分の車いすと同じ色にして欲しいっていうのでどんどん色が増えていって。これが今だとインスタグラムとかに投稿すると、海外の人達が見ても、ピアスだし車いすだから分かりやすいのでこれを買いたいと問合せもきて、本当にユニバーサルなことだなと思っています。それで、私はもともとこういう車いすから今障がい者スポーツ、こういう車いすラグビーとか、この辺はすごくマニアックですけど、義足で陸上ですね、陸上競技だったり、これはアンプティサッカーといって、足のない人達がどうやって競技するかというサッカーとか、あと新田のんのちゃん、シットスキーのプローチとか、ポッチャとか。こういうちょっとマニアックな障がい者スポーツを広めるグッズを作っているんですけど、それで車いす関係のものを作っていたので、知事はもう見に行かれたでしょうか、この映画（こんな夜更けにバナナかよ、映画のポスター）。

高橋知事

あの有名な。

大海恵聖さん

5月にこの映画を大泉洋さんがやるってリリースされたとき、鹿野さんの車いすが絶対出てくると思って、これだけ車いすのグッズを作っていたので、(グッズの作成を)やりたいと。私がやる、私以外誰がやるっていう感じで松竹に持ち込み企画で作らせて欲しいと。10月に決まったので6ヶ月くらいかかってやっと作り上げたのが今回この、映画の中に出てくる車いす、古い車いすなんですけれど、それとバナナと、この革の北海道マークを赤平の老舗のいたがきさんに協力していただいて、千枚作っていただいてこれを作ったんですけど、その裏を見ていただくと、このデータ自体も障がいのある人達が、3Dデータって難しいんですけど、体が動かなくてもIQがすごい高い病気とかあるんですよ、その方達にデータを作ってもらって、作業自体は精神・知的（障がい者）の人達にやってもらって、っていうコーディネートを私がしながら松竹のような大きいステージにみんなを連れて行って、そういうものづくりも障がいがあっても出来るよっていうのをこの映画で伝えたいという企画書を松竹さんに出したんですね。この障がいがある人達に3Dデータを作ってもらっているのは、

私自身が東京から講師を呼んで、障がい者の人達に本物の3D データを作るっていう講習を企画しているんですよ。だけど一人でやっているのですごく赤字なんです。なのでそういうのを私みたいな個人じゃなくてみんなでもっとサポートしてもらおう、北海道全体でサポートしてもらいながらみんなに教えて、そういうちゃんとした立派なところに物を出すという流れを作りたいなと思って、ご協力いただけたら嬉しいなと。

高橋知事

我々役所が商売に入ると絶対失敗しますので、人をご紹介申し上げて、そういうなかで、今大海さんが仰った目的を達成出来るような方々と巡り会えればいいですね。

渡辺部長

丁度、障がい者スポーツも私が担当しております。今障がい者スポーツの全日本のノルディックの監督の方にも東京から来ていただいて色々お話を聞いたりしたものですから、丁度その時シットスキーとかそういうお話。

高橋知事

これはストラップだけでも、のんのちゃんのスキーの本物を作るのに、道庁職員が結構、補助金とかそう言うのじゃなくて、みんなで一緒に企画書作ってクラウドファンディングでお金を集める形でサポートしたんです。

大海恵聖さん

そのリターン品を私やりました、私。お土産の方。

渡辺部長

本州にしかシットスキーを作る技術が無かったんですけど、今北海道で2社くらい作れるようになった。

大海恵聖さん

のんのちゃんを応援したかったので、一番最初に作ったのはシットスキーだったんですよ、そこから広がりながら、みんなに助けてもらっている。今日も27年と28年に受賞された長岡（行子）さんと上野（美幸）さんに帯広から応援しに来てもらって、そうやってみんなで繋がりながら色々やりたいと思っています。

高橋知事

この映画ね、たまたま昨日だったか今日だったか、新年交礼会でお会いした方が、この方のモデルになっている方をボランティアで介護をしておられた方。

大海恵聖さん

今日の昼ですか？会ってくるっていう話を昨日聞きました。

高橋知事

じゃあご存じだと思うけれど。彼が言うには、このモデルの方は2004年か2005年に亡くなられた方なんだそうですね。その次の年に、この原作の本が発行されて、そしてそれが映画化されるのは最初は反対だったと。それはあまりにフィクションが多いんでね。ただやっぱり出来てみて、すごく反響も多くて、やっぱりこういったことを通じて障がいのある方に対する理解も進む、その舞台が北海道だというのは素晴らしいことだなと言っておられました。ご存じの方だったんですね、内々の方だった。

大海恵聖さん

そうなんですけれど、松竹の方とは何か一緒にやっていたわけじゃなくて、メールだけでやりたいです、いいですってやったので、札幌フィルムコミッションってあの観光地誘致しているところとも全く繋がってなかった。なので、11月に松竹さんにもう言っても良いですか、言っても良いですよ、って発表したときに周りがみんな驚いて、グッズ作っているの札幌の企業だったのか、みたいな感じになっていたんですね。

みんなも自分たちで作ったグッズが映画のグッズになったってとても喜んでいるので、こういう仕組みをもっともっと作っていきながらやりたいなと思っているのと、今から2020年東京パラのグッズを私がみんなと作るグッズができれば、札幌でやるときにまたその仕組みを使って、こっちでやるパラのグッズづくりの仕組みも作りたい。

高橋知事

2030年を今狙って、まあ30年か34年になるかあれですけども、必ず獲りたいですよ。その時まで、これがまた素晴らしいものになりますように。

大海恵聖さん

そうですね、仕組みを作りたいなと思っています。

渡辺部長

スポーツの部分との繋がりという部分でおもしろいことが出来るかもしれない。

高橋知事

これ行政の話になるんですが、オリパラで言えば、今まで健常者のスポーツ、オリンピックはこちらのご担当、パラリンピックは別の部の担当だったんだけど、やっぱり行政ってともすれば縦割りっていわれるから一緒にしようってということで今は環生部長さんに全部まとめて見ていただいています。

渡辺部長

私どものところに来ると健常者のスポーツと一緒になるとですね、パラもやっぱりアスリートなんですよ。要は社会参加とかということもあるんですけど、アスリートとして本当にトップクラスのアスリートを育てるという観点。

高橋知事

車いすバスケットだったか、車いすアイスホッケーだったかで、道南の方のスターの方いるじゃない。石崎さん・・・？

大海恵聖さん

池崎さんですか？車いすラグビーです。今すごいテレビに出ている。

高橋知事

池崎さん、この前ほっかいどう大運動会にもおられましたよ。

大海恵聖さん

それで車いすバスケの方が競技人口いたのに、ラグビーの人が周りにいっぱいいたので、日本に10チームしかないラグビーを先に作ってしまった。バスケは100チームくらいあって、そっちを作った方が売れたのに、先にラグビーを作りました。

高橋知事

そうですか、良いお話をお伺いできました。

牧野准子さん

私も知事にお願いしたことがありまして、自分が障害を持って分かったことが沢山あるのですけれども、これからパラリンピックだとか、札幌でもそういうスポーツ等をやっていくなかで日ごろ私が感じているのが設備面のバリアフリーと、人の心のバリアフリーの両方が必要だということ。おこがましいことではあるが、私に分かったことをこれからのまちづくりとかにも提言させていただいて、取り入れていただける機会を沢山作っていただきたい。例えば公共施設を作るときも、私が感じていることやお伝えできることがあれば、是非関わらせていただきたい。

高橋知事

建築士でいらっしゃいますものね。わかりました。これは環生部の担当と言うよりも、ある意味保健福祉部であり、また建設部の（担当になります）。ちょっとそちらにまた伝えさせていただきます。これから冬期のオリンピック・パラリンピックを誘致するということになると、当然そういったセンスを踏まえての建物づくり、まちづくりが今まで以上に重要になると思うんですね。こんなことを言って申し訳ないが、ただやはりコストとの関係があり、

100%パーフェクトというのは、税金の使い方として難しい。少しずつセンスで、今心のバリアフリーと仰った、そういうことに配慮しながらやる、というのが何より重要だと思います。

牧野准子さん

仰るとおり、意識を皆様に持っていただくというか、やっぱりお金をかけてハード面を整備していくのは時間も経費も掛かるのだけれど、工夫で、まず知っていただくということなんです。例えば宿泊設備でも、ホテルが今そういう（障がいのある人のための）お部屋が足りないと言ってますけど、完全なバリアフリーにしなくても、ちょっとした配慮とか気遣いで泊まれる人達はたくさんいるはずなんです、だからバリアフリールームばかり増やさなくても、気付きや工夫で可能になることが沢山あるので、そういうことも伝えていきたいので、知っていただきたい。

渡辺部長

パラリンピックの選手村のようなところもやっぱり、健常の方とはまた違う、トイレの大きさとか色々気付くことがあります。

牧野准子さん

そうなんです、完璧にバリアフリーにしなくても、ちょっと手すりがあったり、段差解消とか、福祉用具を置いていただくだけで助かる部分が沢山あるので、知っていただきたいと思います。

高橋知事

わかりました。